

### 3 カムイヌプリ (摩周岳) 857m 北海道

鴨下重彦



カムイヌプリは道東の阿寒国立公園にあるカルデラ湖、紺碧の摩周湖の東岸に噴出したコニーデ型火山である。国土地理院発行の『日本の山岳標高一覧・1003山』や武内正著『日本山名総覧』はじめ、山のガイドブックではみなカムイヌプリ（摩周岳）と摩周岳が括弧に入っているが、道路地図で

は摩周岳（カムイヌプリ）と逆になっている。

カムイヌプリはアイヌ語で「神の山」であり、湖畔の第一展望台からの眺めでは、その名に恥じない威厳があり、摩周湖の神秘性を一層引き立てている。因みに北海道では、大沼と駒ヶ岳、洞爺湖と有珠山、支笏湖と恵庭岳、阿寒湖と雄阿寒岳のように、湖と山が対になって固有の美しい景観を形成しているが、摩周湖とカムイヌプリはそれらの中でも最高のコンビである。

摩周湖は周囲約20キロ、流入、流出する河川がなく、また気温も低いため日本一の透明度を誇り、世界でもバイカル湖と首位を争うという。なお、アイヌにとっての神は罷であるが、摩周岳やその周辺に罷はいない。「マシュウ」の語源には諸説あるが、「鍋のような湖に影が泳ぐように見える」というアイヌ語の意味がある。

この山には幕末の探検家で北海道の名づけ親、松浦武四郎が安政5年に登った記録がある。彼が公刊した日誌で登ったとされる北海道の山々の記録はフィクションが多いといわれているが、別に手書きの原稿が残されていて、カムイヌプリ登頂はそこにも記載があるので史実と考えてよいという。彼が登ったルートはほぼ現在の登山道であつたらしい。

この山は天気によければ西の美幌峠から遠望出来る。伝説であるが、その昔、屈斜路湖の北にある藻琴山とオプタテシケが槍を投げあつたところ、それが摩周岳に当たり、怒った摩周岳が遠くに飛んで、国後島の爺爺岳（1822m）になったという。なお道南の鷲別岳（室蘭岳）の東端に、標高750mの同名のカムイヌプリがある。また漢字の神威岳（山）は北海道に多いことはよく知られている。

JR釧網本線の「弟子屈」は20年前に駅名を「摩周」に変えたが、第一駐車場まではタクシーで約15分。登山道はその南端から湖の南側を廻るように延びている。第一駐車場はかなり広いが、レンタカーで来て登山のときには、係りに話しをして駐車場所の指示

を受けた方がよい。山頂との標高差は300mだが、距離は約7km強あるので意外に時間がかかり、登り3時間、下り2時間半とみた方がよいだろう。途中に水場はない。登山道はよく整備されており、晴れていれば歩き始めは左手に湖面が見えていているが684mのコブに三角点があり、それを過ぎると湖面に別れ、代わって正面になだらかな西別岳が現れてくる。

西別岳は標高800mで摩周岳より低いがお花畑がある。途中2つの小コブを越えると標高665mの西別岳分岐で、ここから西別岳山頂迄約50分である。カムイヌプリへは左折する。最期は勾配がきつくなり、右手の急斜面を巻くようにして岩場の狭い山頂に飛び出す。

筆者は摩周湖を三度訪れているが、前2回は霧で湖面がかろうじて見える程度。登山で訪れたのは2002年6月16日であったが、この時は三度目の正直で快晴となり大汗をかいて辿り着いた山頂からは、西南に雄阿寒、雌阿寒、東北に斜里岳を始め知床の山々が望めるなど、足下の摩周湖と共に絶景を楽しむことが出来た。

途中登山道脇にはクロユリとエンレイソウが咲いていた。群生でなく一輪一輪であったので特に印象が深かった。



二万五千図：摩周湖南部

交通機関：JR摩周駅よりバス、又はタクシー

女満別空港から出る観光バスも利用可能

問い合わせ先：弟子屈町役場 0154-82-2191

摩周ハイヤー 015-482-3939

阿寒バス 0154-37-2221

最寄りの温泉：摩周温泉・川湯温泉（弟子屈町）